世界と未来と少年少女

マークピース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界と未来と少年少女

【Ｎコード】
Ｎ２８２４Ｚ

【作者名】
マークピース

【あらすじ】
平々凡々、どこにでもいるような高校生、新藤真は、明日から始まる夏休みに思いを馳せていた。
が、友人らとボーリングに行った際、突然、真の頭に激痛が走った。
そして、この頭痛をきっかけに、彼は『世界争奪戦』に身を投じていく事となる。
『アルカナ』と呼ばれる２１人の能力者。
果たして、彼らの辿る運命とは―

プロローグ

突然だが、君に一つ質問をさせてもらおう。

'' 選ばれし者''、と言われて、君は何を思い浮かべる？
勇者、王、超能力者……まあ、咄嗟に思い浮かぶのはこのくらいだろうか。
私はこう考える。

'' 選ばれし者'' というのは、生まれながらに選ばれているのではなく、生きていく内に選ばれる'' 資格'' を得て、始めて選ばれたと言えるのではないのか、と。

まあ、この話に意味があるかどうか、それは、これから私が語る物語が教えてくれる筈だ。
保障は出来ないがね。
無駄話が過ぎたかな、話を続けよう。
'' 選ばれし者'' とは言うが、選ばれたからには、彼らには何らかの責任や役割があるという事だ。
それを果たすかどうかは、人にもよるけどね。

じゃあ、これから語る物語について、少し触れていくとしよう。

初めに言っておく。
これは、選ばれるべくして選ばれた、２１人の'' 選ばれし者'' の物語だ。
どんな風に選ばれたのかって？
それをこれから語っていくんだ。

例えばその中の１人、新藤真。

彼はどこにでもいるような、極普通の男子高校生だ。
だが、とある事件、そして、とある少女との出会いによって、彼の運命は大きく変わる事になる。
果たして彼が迎える結末は、希望か絶望か。
それもこれから語っていく事にしよう。

では、ぼちぼち始めていこうか。

前述したように、これは２２人の'' 選ばれし者'' の物語である。
ハッピーエンドで終わるのか、それともバッドエンドを迎えるのか。

それもまた、これから語る事だ。

第1話　覚醒と始まり（前書き）

お目汚し頂ければ幸いです。

第1話　覚醒と始まり

ある夏の日の朝。

青い空に白い雲。

太陽はアスファルトを照りつけ、蝉の声が絶え間なく聞こえ続ける。

そんな中、学生服を着た少年、新藤真は自分の通う高校へと向かっている最中だった。

勉強の嫌いな極普通の高校生である真だが、その心は踊っていた。

今日は、彼の通う高校の終業式。

ようやく一学期ともおさらばだ。

明日からは待ちに待った夏休みである。

彼の心は、そればかりに気を取られていた。

すると

「オラァ！」

「危ねぇ！」

後ろから飛び蹴りを仕掛けられた。

危険をギリギリで察知し、横に転がり回避する。

慌てて横を見ると、真の予想通りの人物が立っていた。

染め上げられた茶髪に、この付近でも有名な女子校、万丈学院の制服を着る少女。

中学時代の後輩、御堂静香だった。

「てめぇ……毎回毎回同じような事を」
「あら？マンネリ？だったら次はブロックでも投げつけてみようかな」
「死ぬわ」

真は立ち上がり、埃を払う。

「何でお前がこんなとこに居るんだよ。万丈は逆方向だろうが」
「昨日が終業式だったんだ。暇だから図書館にでも行こうかなと思って」
「……制服で？」
「図書館みたいな公共施設への外出時は、制服着用が義務付けられてるの」
「……相変わらず、無駄に規則は守るんだな」
「無駄には余計よ、この凡夫が」
「凡夫で悪かったなこの野郎。てか、俺が先輩だって事忘れてないか？敬えや後輩が」
「え？　今更先輩面っすか？　ないわー。新藤先輩マジないわー」
「際限なく腹立つ喋り方だな、オイ」

そんな事を話していると、いつの間にか、真の高校の前まで来ていた。

「おっと、じゃあな御堂。夏休みはなるべく会わないようにしよう

な」
「よっしゃ。2日に一回はラブコールしに行ってやんよ」
「誤解を招く事言ってんな」
「はは！じゃあね」
「……おい」
「ん？」
「最近、この辺りで通り魔がうろついてるらしいぜ」
「あー、そう言えばそんな話も聞いたわね。それで？」
「……その通り魔って奴は、未成年の女ばっか狙ってるらしい」
「ほうほう。で？何が言いたいの？ほれほれ、言ってみなさいよ」
「……お前、わざとだろ？」
「え？　何の事？　さっぱりだよ」
「ったく……つまり、何だ？　その……気をつけろよ」
「……あ、ありがとう」
「照れてんじゃねぇよ。言わせたくせに」
「て、照れてないわい！」

御堂は舌を出すと、図書館へと走って行った。
すると、そのやり取りを見ていた校門の前に立つ男が、真に声をかける。

「朝から女子生徒と登校とは、随分いいご身分だな新藤」

いかにも小物が言いそうな台詞を放つこの男は、真の通う高校の体育教師、須郷道隆だ。
生徒からの人気がある、人当たりのいい熱血教師なのだが、異性との交際経験はほとんど無いらしい。

そのせいか、高校生らしく異性との青春に勤しんでいる生徒だけには厳しかった。

「ったく。朝から乳繰り合いやがって」
「合ってません」
「うるせぇ。憂さ晴ら……教育的指導だ、抜き打ち身体検査をしてやる。そこに直ってバッグを寄越せ」
「思いっきり私怨ですよね！？　『憂さ晴らし』って言いかけましたよね！？」

実際、真のバッグには漫画やゲームなど、持ち込み禁止の物がいくつか入っていた。

「問答無用だ。しかもあの制服、万丈だろ？　あのお堅いお嬢様学校の生徒をどうやって落としやがったこの野郎。いや、マジで教えてください、お願いします」
「い、いや、あれ別に彼女とかじゃありませんし」
「……え？そうなの？」
「はい。中学時代の後輩です」
「……」

須郷はしばらく間を置いて考えると

「そうか、そうだよな。お前にあんな可愛い彼女が出来る筈ないか」

真は須郷をぶん殴りたい衝動を必死で堪えた。
おそらく、殴りかかった所で返り討ちにされるのがオチだからだ。
そうこうしている内に、朝のホームルームの開始を告げる予鈴が鳴り響く。

「あ、やべ！」
「急げ急げ。あ、俺のせいで遅れたとか言うなよ」

真は敢えて何も突っ込まず、自分の教室へと走った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「２－２」と書かれた教室の前で、真は中の様子を伺っていた。
すると、既にホームルームは始まっており、担任の中島が出席を取っているようだった。
中島は須郷と正反対のタイプで、陰湿な嫌味を言う為、生徒からは嫌われている。
真は「おのれ須郷め」と毒づくと、意を決して教室のドアを開けた。

「すいません、遅刻しました」
「……成績は悪い、遅刻もする。救いようがないな、まったく」

中島は小声で言っているつもりだろうが、思いっきり聞こえている為、真は心中で舌を打つ。

「ちょっと、須郷先生から指導を受けていたので」
「……馬鹿は群れる習性があるようだな。もういい、座れ」

危うく激昂しそうになりながらも、今日を乗り切れば、と、真は心を沈めて席に着く。
すると、隣りから真に向かって小声が囁かれる。

「朝から災難だな、真」
「まあ、今日を乗り切れば夏休みなんだ。あいつの顔見ないでいいと思うとせいせいするぜ」

真の言葉に、隣りに座る級友、堀野雄介は苦笑する。
雄介とは二年生で同じクラスになりまだ日も浅いが、どうもこのニ人は気が合うようで、出会ってすぐに打ち解け合った。

「じゃあ、景気付けにボーリングでもどうよ？　今日は昼で終わり

だし」
「お、いいねぇ。何人か誘ってくか」
「そうだな。女子が好ましい所だが……まあ、そううまくはいかないわな」
「よく言うぜ。経験豊富そうな面しやがって」
「そんな事ないって。俺って一途だからさ」
「おい、そこ！私語は慎め。まったく、遊びしか頭にないのか」
「……じゃあ、また後でな」

真は、これから始まる夏休みに思いを馳せていた。
盆には実家にも帰省する予定だ。
考えれば考えるほど、放課後が待ち遠しくて堪らなかった。
だが、彼はまだ気付いていなかった。

この日が、この後の行動が、自分の運命を大きく変える事に一

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

放課後、真と雄介はクラスの友人達に声をかけ、ボーリングへと誘った。
すると、その話を聞いていた女子も何人か参加する事となり、気が

つけば１０人ほどでボーリング場へと向かっていた。

「予想以上に集まったな。女子も来てくれたし」
「ああ。いつも異常にやる気が入るってもんだ」
「現金な奴だよ、お前は」

ボーリング場に到着すると、平日な事もあり空いていた為、４レーンを使って一行は席に着く。
とりあえず、適当にグループを作り、チーム戦を行う事にした。

「ビリのチームは罰ゲームな」
「いや、ガーター一回でも罰ゲームだろ」
「きっついな」
「おい！　こいつマイシューズ持って来てやがんぞ！」
『何！？』
「ふっ。勝負は始まる前に決まってんだよ」
「取り上げろ。ついでに腕も痛めつけておけ」
『了解』
「や、やめろ！ちょ、ひ、肘鉄だけは！　肘鉄だけはやめ、あ、ギャアアア！」
「ま、まあ、その辺にしてあげたら？吉井君の腕、青くなってるし」
「さ、坂上さん……あ、ありがとう」
「万死に値する。人間ボウリングの刑だ」
『了解』
「あの、申し訳ありませんが、他のお客様のご迷惑になるので……」
『あ、すいません』

店員に注意を受けながらも、一行のテンションが下がる事はなかった。
それから、真達はボウリングを楽しんだ。
雄介の3連続ガーターで特製ミックスジュースを飲まされたり、吉井が坂本を口説いている事が発覚し、再び騒いでいる所に強面の店長が出てきたりと、とにかく騒がしい一日だった。

だが、何より楽しかった。

またこんな風に集まれればいい、真はそう思った。
そうして、2時間ほどが経過した頃。

「ちょっとトイレ」
「うんこか、真？」
「女子もいんだからそんな品のない話はやめろ。小便だよ」

そう言うと、真は立ち上がり、トイレへと向かった。
中はガランとしていたが、意外と綺麗になっており、窓から差し込む夏の日差しが磨かれたタイルに反射していた。
真はさっさと用を足し、戻ろうとする。

が、その時

「痛ッ！！」

突然、真の頭を信じられないような激痛が襲った。
あまりの痛みに、その場に立ち竦んでしまう。
頭痛は十分以上続き、声を出さないようにするので精一杯だった。
ようやく痛みが和らぎ、真はよろめきながら立ち上がる

「……ったく。何だってんだ」

頭を押さえながら毒づく真。
その時、ギィという音と共に、トイレのドアが開いた。
入ってきたのは、真のよく知る人物だった。

「……中島、先生？」

真の担任、中島靖臣は、真を品定めするかのような目でじっと見つめる。
やがて、ホッとしたように息を吐く。

「どうやら、まだ--発現--はしていないようだな。手っ取り早く済みそうだ」
「……？」

訳が分からないと言わんばかりに、真は首を傾げる。
すると、中島の袖から、何か光る物がスルリと滑り落ちた。

それがナイフだと知るのに、長い時間はかからなかった。

「新藤。私に為に死んでくれ」
「ッ！？」

中島は、ナイフで真の心臓を突きにかかる。
真は咄嗟に床に転がるが、彼の右腕をナイフが掠めた。

「お、おい！　アンタ、何しやがんだ！」
「アンタ？　口の利き方がなっていないようだな」

そう言うと、中島は手前にナイフを投げ捨てる。
その時、信じられないような出来事が真を襲った。

中島が投げたナイフが、突然、浮上し始めたのだ。

当然、中島が触れている訳でもなく、糸によって吊るされている様子も無い。
ナイフは真の胸の辺りの高さまで浮上すると、ピタリと空中で静止した。
今度こそ、真の頭がパニックに陥る。

「な……あ、ありえねぇ。どんなトリックを、いや、何で中島が……」

「‐‐俺を狙うか‐‐か、聞きたいか？」

中島は、真が見た事も無いような醜悪な笑みを浮かべる。
真は動く事すら出来ず、ただ立ち尽くすしかなかった。

「それはな……やめた。知らずまま……」

「死ね」という中島の言葉と共に、静止していたナイフが高速で動き出す。
ナイフはまっすぐに真の胸を狙い、どう避けようが、確実に真に直撃する、そんな速度だった。
この時、真の頭には、今までの人生が、出来事が、走馬灯のように駆け巡る。
そして、ある思いが、真の頭に残った。

―死にたくない。

「う、わああああああああ！！」

真は叫び、両腕をクロスしてガードする。
しかし、真は知らなかった。
そのナイフが、真の腕を貫通し、胸をも貫くほどの‐‐異質‐‐なものだという事に。
そして、ナイフが真の腕に突き……刺さらなかった。

なんと、ナイフは真の体の数ｃｍほど手前で静止していたのだ。
どうやら中島が何やら手を加えたと言う訳ではなく、その証拠に、真の姿を見た中島の顔は、驚きと屈辱の色に染まっていた。
だが、真も何が起きたのか分かっておらず、目を白黒させている。

「……え？　生き、てる？」
「ば、馬鹿な……！　新藤……お前……何をした！」
「何をしただって？　‐‐発現‐‐させたに決まっているじゃないか」
「！　誰だッ！」

中島は大声を上げながら、後ろを振り返る。
声の主は、トイレの入り口に立っていた。
眩いほどの金髪に、高い長身。
その風貌は日本人のものではなく、その顔には高い鼻に、青い瞳が輝いている。

「この状況からして、その答えは決まったようなものだろう？『魔術師』」
「……貴様。何故、私の能力を……！」
「何故だって？　本気で言っているとしたらお笑い種だね。‐‐アルカナ‐‐だからに決まっているだろう？」
「……どうしてここが分かった？」
「……まさか、本気で言っているのかい？　あれだけ派手に能力を

使っておいて。この辺では……えっと、通り魔、って言うんだっけ？」
「と、通り魔って……中島が！？」

男の言葉に、真は驚きを隠せなかった。
だが、よくよく思い出して見ると、被害者の女性は全員、死角からナイフのようなもので切りつけられたと証言していたと、ニュースで報道されていた。
あのナイフを見れば、それも納得出来る。

「馬鹿みたいに使いまくるから、こうやって場所が割れるのさ。分かった？」
「……肝に銘じておこう。で、やはり貴様も－－アルカナ－－なんだな？」
「さっきそう言ったじゃないか。やっぱり馬鹿なのかい？それとも、日本ではそれが普通だとか？」

その言葉に、中島は頭に血管を浮き上がらせる。

「……いいだろう。新藤、お前は後で相手をしてやる」

突然、中島は両袖からナイフを取り出すと、それを男に投げつけた。
が、男はそれを避けもせず、ただ手を前に突き出すだけだった。
すると、突然、金髪の男の手から炎が噴き出したのだ。

火は勢いよく飛んでいき、中島のナイフを簡単に溶かしていく。
そして、火の手は中島までに及び、中島は断末魔を上げる。

「がああああああああああ！！」

中島は慌てて横に転がる。
だが、体は大分火にやられており、肉の焦げる嫌な臭いが真の鼻を突いた。

「おや？　挨拶代わりのつもりだったんだが……随分と深手を負ったようだね。今ので分かったと思うけど、僕のアルカナは『太陽』。熱と炎で敵の体を燃やし尽くす、えげつなさの塊のような能力さ」
「き……貴様ァァアアアア！」

中島は怒り狂い、袖から何十ものナイフを落とし、それらを空中に浮遊させる。

「私の『魔術師』は……ナイフを創り出し、自由に操る能力！貴様にこれがかわせるかァァァ！」
「……ちょっと挑発し過ぎたかな。さすがに、全部を燃やし尽くすのは……」

すると、男は思い出したかのように真を見る。

そして、そのまま真を引っ張り上げると

「僕は、言わば君の命の恩人のようなものだよね？」
「え？あ、ああ、まあ……」
「それじゃあ、その恩を今返してもらおうか」

そう言うと、男は自分と中島の間に真を引っ張り出す。

「なっ、ちょ！」
「大丈夫。君の能力が本物なら、防げる筈だ」

そうこう言っている内に、中島はナイフを発射させ、真を狙う。

「うっ！」

真は人生二度目の‐‐死‐‐が近づいてくるのを感じた。
さっきのように腕をクロスさせ、防御の構えを取る。
が、やはり、ナイフが真の体に届く事はなく、全て真の体の数ｃｍほど手前で静止し、そのまま床に落下した。

「……新藤、お前はまた私の邪魔をするのか！」
「殺そうとしたくせに、よく言えたもんだよ」

「な、何だよこれ……何でナイフが刺さらないんだ……？これじゃまるで……」
「化け物、とでも言いたいのかい？」

真の言葉を、金髪の男が代弁する。

「残念だが、その通りだよ」
「え……？」

「君は巻き込まれたんだよ、文字通り『世界』を賭けた戦いにね。まあ、遅かれ早かれ、君にも分かる事だろうけどね」

男の言葉を、真はただ呆然と聞くしかなかった。
束の間の静寂に、外から聞こえる蝉の鳴き声だけが、騒がしく鳴り響いていた。

第1話　覚醒と始まり（後書き）

ということで、「世界と未来と少年少女」、無事に始める事が出来ました。
少し展開が早過ぎたかもしれませんが、お付き合い願えたら幸いです。
2，3日に1話のペースで更新していきたいです。

そんなこんなで次回予告。

襲い掛かる中島の前に、真は訳が分からないまま応戦する。
そして、戦いは決着と共に、新たな戦いの幕を開かす。
次回、「受難と選択」。
頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けたら幸いです。
質問も頂ければお答えします。

第2話　受難と選択（前書き）

前半バトル、後半新キャラ登場です。

第2話　受難と選択

夏の日差しが、ジリジリとトイレ内の窓から差し込み、トイレ内の温度を上昇させる。
金髪の男と真が会話する中、中島は口を開いた。

「……おい、お前ら」
「ん？ああ、混ぜて欲しいのかい？」
「……馬鹿にするのも大概にしろよ貴様らァ！」

男の一言に、中島は激昂し、床に散らばっていたナイフが再び浮遊し始める。

「おっと、無駄話が過ぎたかな。それじゃあ、そろそろこの戦いにも幕を下ろそうか……と言っても、さすがにこのナイフを燃やしつつ、あの男にとどめを刺すのは少しばかり困難だろう。そこで、だ」
「……俺にやれってか？」
「話が早くて助かるよ。なに、多分、今の君なら一発で気絶ぐらいに持って行けるだろう。意識さえ奪ってくれれば、後は僕に任せてもらって結構。面倒だけど請け負ってあげるよ」
「……まさか、殺すって訳じゃ……」
「それが一番手っ取り早いんだけどね。まあ、僕も人殺しにはなりたくないし、気絶させるだけで十分さ」
「……分かった。その前に、ちょっといいか？」

そう言うと、真は中島へと体を向ける。

「……先生」

「……」

「何で、通り魔なんて馬鹿なマネしたんだ？　確かに、俺はあんたが嫌いだったよ。けど、そんな事をするような奴だとは思ってなかった……正直、最低だ」

「……お前に何が分かる。俺の半分も生きていないお前に……！　鬱陶しかったんだよ！　常に群れ、男に愛想振りまく馬鹿なメスガキが！　だから制裁してやった。それだけの事だ」

この時、真の頭の中の何かが切れた。

正直、事態に頭は追いついていなかったし、状況もよく飲み込めない。

だが、自らの愚行を、事もあろうか自分の生徒に、誇らしげに語るこの男が、真には許せなかった。

「……頭はいいと思ってたんだけどな」

「……何だと？」

「聞こえなかったのか？　あんたは馬鹿だって言ったんだよ、駄目教師」

「……黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れェ！　新藤ォォオオオオ！！」

中島は、雄叫びを上げながら、浮遊していた十本ほどのナイフを真達に放つ。
2人はそれを屈んでかわし、真は中島に向かって走り出す。
が、ナイフは途中で方向転換をし、背後から真を狙う。
それを見た金髪の男は、苦虫を噛んだかのような顔をすると、真と中島に向かって手を突き出す。

「……はぁ、まったくもって、嫌になる」

突然、男の手から閃光が放たれる。

「うッ！」

中島は手で閃光を遮り、目を細める。
が、彼は失念していた。
真を狙ったナイフが、自分の方に向かっているという事に。
そして、金髪の男は大声で真に叫ぶ。

「後ろから来ているぞ！」
「！」

真は、咄嗟に、もう一度それを屈んでかわす。
そして、ナイフは目が眩んで視界がぼやけている中島に向かって突き進んでいく。

「しまっ……！」

中島は慌ててナイフを操作しようとするが、時既に遅かった。
結果として、中島の体を、二本のナイフが貫いた。
一本は肺に、そしてもう一本は心臓を捉える。
二本共、中島の肉を、骨を砕き、体を貫いていった。

「カハッ！」

中島は血を吐き、そのまま膝を着くと、倒れる。
真は、何が起きたのかまるで分からなかった。
震える真の元に、金髪の男が歩み寄る。

「……当たり所がよければ、まだ助かったんだけどね。さすがに心臓となると……」

男がそう呟くと、真は振り返り、男の襟を掴む。

「どうして……どうしてあんな事しやがった！　気絶させればいい

って言ったのはてめぇじゃねぇか！　それなのに！」
「……正直、すまないと思ってる。だが」
と、男は中島が真に投げた二本のナイフを拾い上げ、中島の傷口を指差す。
「心臓の方の傷を見てくれ」
「……肺の傷より……大きい？」
「ああ。このニ本は、一見同じ物に見える。　だが、おそらく、こちらのナイフは、肺に傷をつけたナイフより威力を高くしてたんだろうね。多分、君の体を貫くぐらいに」
「えっ……」
「他のナイフも、何本かはこれと同じものだと思うよ。さすがは『魔術師』と言った所さ」
「……それを見抜いたのか？　あの一瞬で」
「まさか。買い被りもいい所だよ。ただ、今の君の強度を知っていながら、不用意な行動を取るような男には見えなかったからね」
「……けど、だからって殺さなくても……！」
「……だから、それは悪かったって言っているだろう……それに、君も今に分かるさ」
男はナイフを見ながら言った。
「この『世界争奪戦』がどんなものかを、ね」
「世界……争奪戦？」」

「……う、うぅ」

突然、中島が呻き声を上げる。
真は思わず中島を見た。
彼の顔には、後悔のような、そしてどこか寂しそうな表情が浮かんでいた。

そして、それが真の見た、中島の最期の顔だった。

その時、中島の体が、足から煙のように消え始めた。
やがて、それは全身に及び、中島の体はその場から綺麗に消滅した。
真は、震えながら、その始終を見届けた。

「な……何だよ、これ」
「……死んだ『アルカナ』の末路さ。　死体さえ残らない、惨めなもんだよ」
「……『アルカナ』ってなんだよ……漫画じゃねぇんだよ……こんなの……説明してくれよ！」
「……僕が説明しなくとも、すぐに、嫌でも分かる事になるさ」

そう言うと、金髪の男は、トイレのドアへと向かう。

「お、おい！」
「……なんだい？」
「……あんた、名前は？」
「ああ、名乗ってなかったね。まあ、名乗る理由もないんだけど」

男は立ち止まると、顔だけを真に向ける。

「アルバート・ベイルだ。歳は１８。一応、君の名前も聞いておこうか」

「あ、ああ。新藤真だ。……とりあえず、ありがとな」

真はアルバートに手を差し出し、握手を求める。

が、アルバートは微妙な表情を浮かべるだけで、その手を握ろうとしない。

「……やめておこう。敵になるかもしれない人間と馴れ合うわけにもいかないからね。今回は例外として」

「敵って……」

「じゃあ、僕はいくよ。　縁があったらまた会おう。　もっとも」

トイレから出る寸前、アルバートは呟く。

「今度会う時は、十中八九、敵としてだろうけどね」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

アルバートが去った後、真はしばらくの間、トイレで佇んでいた。
携帯を見れば、トイレに来てから、もう２０分程度が経過している事になる。
いや、２０分しか、と言うべきだろう。
実際、さっきまでの出来事は、たったその程度の時間にしては濃密過ぎた。
すると、トイレのドアが開き、待たせていた雄介が中へと入ってきた。

「あ、いたいた。何してんだよ真……ん？　何か臭うな？」

真も気付いていなかったが、確かに、トイレの中には何かを焼いたような臭いが漂っていた。
アルバートが、炎で壁や床のタイルを焼いた時のものだろう。

「まあいいや。それよりどうしたんだよ？　そんなとこでボーっとして」
「あ、ああ。ちょっとな……なあ、悪いけど俺先に帰るわ」
「えっ、急にどうしたんだよ？」
「あー……ちょっと用事思い出してな」
「……そうか。　分かった、他の奴らには俺から言っとくよ」

「悪いな雄介」
「いつもの事だろ……まあ、相談ならいつでも乗るからよ。頼りにしてくれ」
「……ああ」

おそらく、雄介はトイレで何かが起きた事を察しているのだろう。
それでも、何も追求してこない気遣いが、真には温かかった。

「じゃあな」
「おう、また今度どっか行こうぜ。電話するから」
「……ああ、ありがとな」

そう言うと、真はトイレから出て、そのままボーリング場を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

帰路を辿る中、真の顔が優れる事はなかった。
中島が見せた最期の顔が、頭から焼き付いて離れなかったのだ。

真は溜め息を着き、近所の商店街へと差し掛かる。
夕方になればそれなりに盛況なのだが、まだ3時前という事もあり、
商店街は閑古鳥が鳴いていた。

「……いつもの風景、なんだけどな」

あんな事があった後だと、何故か商店街の街並みも違って見えた。
真は一度嘆息し、商店街の中を進んで行く。
すると、路地裏で何やら大きな物音が響き渡った。
「喧嘩か？」と、真は何となく路地裏の方を見やる。
その時だった。

―『正義』

「！？」

何が何だか分からなかった。
ただ、突然--声が聞こえた--のだ。
肉声ではない、だがはっきりとした何かの--声--が。
真は思わず辺りを見渡す。
が、商店街に他の人間は見当たらない。
真は直感的に悟った。

おそらく、今、路地裏で起きている出来事は、高い確立で、先ほど
のボーリング場での事件と何らかの関係がある事を。

真は、路地裏の前で立ち尽くした。
この中に行くという事、それはつまり、ボーリング場での出来事のような事を、もう一度体験する事を意味する。
冷静に考えてみれば、あそこで命を落としていても不思議ではなかっただろう。
真は今、選択を迫られているのだ。
路地裏に行くか、無視をするかを。

「……」

しばらく考えた後、真は路地裏に向かって踏み出した。
別に、『世界争奪戦』とやらに関わるつもりは無い。
……いや、おそらくこの中へ踏み込めば、嫌でも関わる事になるのだろう。
だが、それでも真は、踏み出すその足を止められなかった。
彼は--知りたかった--のだ。
何故、自分はこんな訳の分からない能力を授かり、死に掛けるまでに至ったのか。
何故、それで人が死ななければならないのか。
真は、真実を知る為に震える足で、路地裏へと踏み込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

薄暗い路地の中、アイラ・ジェンキンズは走っていた。
何故、彼女が走っているのか。
それは単純明快な答えで、彼女が何者かに追われているからだ。
その何者かが誰なのかは、アイラも知らない。
ただ一つ分かっているのは彼女を追っている者が『正義』だと言う事だ。

この場合、『正義』と言うのは、そのままの意味で使われるものでは無い。
そもそも、少女を路地裏にまで追い込む行動が、正義であるとは到底言えないだろう。

「はぁ……はぁ……」

彼女は、息を切らしながら、路地裏を走り出す。
だが、彼女は名前が意味する通り、日本人ではない。
日本へ来たのも3日前で、ここが都道府県で言うどこなのかも知らない。
当然ながら、そんな彼女にこの辺の土地勘などある筈も無く、先の見えない暗闇の中、アイラの体力は削られていく。

「きゃ！」

遂にアイラは限界を迎え、足をもつれさせ、前のめりに転んでしまう。
そして、ようやく『正義』が彼女の前に姿を現す。

「……よく頑張った、と褒めたい所ですが……一つ、分かりません」

そう言い放った女は、２０歳程度の日本人の女で、化粧一つされていないのだが、それがかえって彼女の顔を凛々しく際立たせていた。

「はぁ……はぁ……」
「何故、能力を使わなかったんですか？　貴女の能力なら、私のスタミナが底を突くまで逃げ切る事も可能だったのでは？」
「……」
「……ああ、なるほど。　土地勘、ですか？」
「……！」
「どうやら、当たりのようですね」

アイラは「しまった」と言うように口を手で押さえる。

「貴女は何らかの目的があってこの地を訪れた。しかし、私に追われている内に、ここが何処だか分からなくなった。つまり、闇雲に能力を使っても、自身の危険を高めるだけと判断した……もしこれが正解なら、それは正しく、賢明な判断と言うべきでしょう」

ほとんど図星だった為、アイラは何も言えなかった。

「まあ、貴女がここを訪れた理由は、この際、さして問題ではありません」

『正義』の女はそう言うと、アイラとの距離を詰める。

「貴女に残された道は二つ　。一つ、私に協力するか」
「……嫌だと言ったら？」
「それならもう一つの道を選んでもらう外ないでしょう。　即ち－－死－－です。　確かに、－－今の－－私では、他の『アルカナ』に勝つ事は難しいでしょうが、貴女の能力ならば問題はありませんからね」

その言葉に、アイラは思わず震える。
どちらを選んでも、彼女が生き残る可能性は薄いだろう。
こんな時、コミックやアニメなら、颯爽とヒーローが現れ、ピンチを救ってくれるのだろう。
だが、路地裏はおろか、表の通りにすら人が居ないこの場所で、助けが来る可能性はまずないと言える。
極限の選択を迫られたアイラは、手を組み、天に祈った。
―誰か、助けて……！
その時だった。

突然、後方の鉄骨が、音を立てて倒れた。
そして、鉄骨の後ろに、悠然と立つ人影が一つ。
『正義』は、やれやれと言わんばかりに溜め息を吐く。

「……どうやら、答えを聞くのはまだ後になりそうですね」

そう言うと、『正義』はゆっくりと立ち上がる。

「あれの始末が終わるまでには、考えを決めておいて下さい」

そして、『正義』は突然現れた人影を睨み付ける。
人影の正体は男で、おそらく制服であろうものを身に纏っていた。
アイラは思わず、思ったままの事を言ってしまう。

「……ヒーロー？」
「……え？　俺が？」

アイラの言葉に、制服の男、新藤真は聞き返す。
やがて、頭を掻きながら、頬を引きつらせてその質問に答えた。

「だったらよかったんだけどな」

第2話　受難と選択（後書き）

という事で、初バトルの終了、そして『世界争奪戦』という戦いの存在が明らかとなった2話でした。
相変わらず展開が早いです。
「早過ぎてついていけない」という声がありましたら、是非教えてくださると助かります。
その他の意見もお待ちしております。

あ、あと、アルバートはアメリカ人です。

という事で次回予告。

立ち塞がる『正義』の『アルカナ』と、謎の少女アイラ。
『正義』相手に、真が取った行動とは……。
次回、「邂逅と提案」。
頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けたら幸いです。
あと、質問も頂けたらお答えします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2824z/

世界と未来と少年少女

2011年12月11日23時52分発行